

佳作

「社会に貢献できる仕事とは」

中西昭三（武田薬品工業 東北支店 福島営業所）

「欲求のかたまり」、これが私の自己評価だ。だからMRはやめられない。

特段の資格も能力もなく、けっして優秀でもない私にとって、人の健康寿命に関われる、社会に貢献できる、そんな仕事は珍しい。

思えばこのかた「人の役に立つ」という経験はほとんどない。ありふれた学生生活を過ごし、理系で勉強をして、恋もして、ラグビーに打ち込んで、バイトをして、深い考えもなく就職した。社会貢献の経験がないどころか、医師やNPOの道を歩もう、という大志も抱かないままでの深慮ない入社。自分のことしか頭になかったのか、それとも自分では人の役に立てないと考えていたのか。とにかく社会に貢献している姿を想像することは容易でなかったし、想像をしようとも考えなかった。まるで別世界の話であった。

ところが状況は一変する。MRとして配属されるとともに社会貢献したのだ。いや、意図してそうなったのではなく、自分のための活動が相手から（医師から）感謝されて、結果として貢献することとなったのである。私自身には何の変化もなく、受け身の活動の結果であったが、学生時代とは環境が異なっていた。「人々の健康と医療の未来に貢献する」という理念のもと、会社が社会への貢献を考えて洗練に洗練を重ねた薬剤と情報、これらを希求していた医療機関へと届けた結果であった。

私の中の何かが変わった。社会に、人々に、「こ・う・け・ん・す・る」。初めての経験だった。自ら能動的に貢献していきたい、そう感じるようになった。自社の薬剤でどういった貢献ができるのか、何を提案していけるのか、徹底的に考えた。情報を収集し、勉強し、提供し、さらにその反響からの情報を収集し、提供する。MRの本来業務、それ自身こそが社会貢献できる内容だったのだ。

ある日のこと、大病院の医師から相談を受けた。「情報提供してもらった情報と糖尿病薬のおかげで、血糖コントロールは良好で患者さんは非常に良い具合。しかし、各医師によって治療方針が異なったり、全員が糖尿病専門の医師ではないためであったりと、理想の治療を統一できていない。患者さんに最新で最良の医療を提供したいのだが、どうかならないだろうか。」

結論として、病院内における独自の糖尿病診療マニュアルを作成することとなった。既

出の糖尿病診療ガイドラインやマニュアル、他地域や他病院の状況などを勘案した上で、代表医師が作成する。その情報収集の一助を依頼された。結果、一冊の院内糖尿病診療マニュアルが完成し、専門ではない医師や非常勤の医師も当病院の標準的治療とその根拠となる考えを理解し、統一した理想の医療を提供できるようになった。私が協力できたことは、あちこち駆けずり回り、講演会をはしごして、様々な立場の医師・地域・医療機関から情報を収集しただけだった。しかし、医師からは一言御礼を頂いた。

「この仕事は君にしかできない仕事だった。他の病院や医師から生の声を多く集めてくること。自社の薬について、誰よりも詳しい情報を持ってくること。いずれも君にしかできない。君がいなければ、その貴重な情報を得ることは難しい。私達と医療に与えた貢献は大きいよ。」

マズローの欲求段階説では、第5段階の最上位が「自己実現の欲求」とされる。しかし彼は晩年、欲求には第6段階「コミュニティ（共同体）発展欲求」が存在すると述べている（注）。「地域社会、企業や国家そして地球全体など、自分が所属するコミュニティ全体の発展を望む欲求、つまり『貢献する』欲求を潜在的に持っている」との説である。特に近年、この説は様々な学者により「自己超越欲求」として肯定され、CSRやソーシャルエンタープライズ発展の一要因であると取りざたされている。社会が満たされ裕福になり、今後ますます増加してくるであろう「自己超越欲求」。これら欲求の満足を、会社として、個人として、実感できる職業はどれほどあるのだろうか。

MRは働きながら、会社で、医療機関で、勉強させてもらえる。医療機関からも患者さんからも、直接的に間接的に感謝され信頼され貢献できる。こんなに素晴らしい職業はあるだろうか。もちろん全ては自分次第。一般に言う利己的な「企業の論理」に始終するか、利他的に社会に貢献できる活動を目指すのか、自分で選ぶことができる。しかし、一つだけ確実に言えることがある。そこに意思がある限り、MRの活動は確実に「貢献」へと繋げることができる。

今の私は完全なる「欲求のかたまり」だ。だから、MRはやめられない。

注) 引用：人をあきらめない組織 HRインスティテュート著